

研究機関名：旭川医科大学

承認番号	17053
課題名	超音波ガイド下末梢神経ブロックの有用性の検討
研究期間	倫理委員会承認日 ～ 2022 年 6 月 1 日
研究の対象	当院で術後鎮痛法として超音波ガイド下末梢神経ブロック・脊柱管ブロック・自己調節型経静脈的投与法（IV-PCA）を施行した患者
利用する試料・情報の種類	<p>■診療情報（詳細：性別・年齢・BMI・ASA・現病歴・既往歴・手術歴・麻酔方法・術中のバイタルサイン・術中の鎮痛薬使用量・麻酔時間・手術時間・ターニケット使用時間・術後の鎮痛評価・リハビリテーションの評価・副作用・合併症など）</p> <p><input type="checkbox"/>手術、検査等で採取した組織（対象臓器等名： ）</p> <p><input type="checkbox"/>血液</p> <p><input type="checkbox"/>その他（ ）</p>
研究の意義、目的	<p>近年、術後鎮痛における超音波ガイド下末梢神経ブロックの役割が大きくなってきている。その利点として、術中循環動態の安定、術後鎮痛の向上、患者満足度の向上が挙げられる。また局所麻酔薬の濃度や投与法の工夫によって優れた分離遮断が可能となり、早期離床・退院と言った医療経済にも影響を与える可能性がある。術後鎮痛法として自己調節型経静脈的投与法(IV-PCA)によるオピオイドの投与も普及しているが、嘔気・嘔吐のために早期離床が遅れるという事態がしばしば発生しており、超音波ガイド下末梢神経ブロックの普及によって麻薬の使用量を減少できるという利点がある。これまで広く行われてきた硬膜外麻酔は効果的な鎮痛方法であるが、血圧低下・下肢筋力低下・尿閉などの副作用がある。さらに近年様々な血栓性疾患予防のため、術前の抗血小板薬・抗凝固薬を内服している患者が増加しており、硬膜外麻酔を施行できない場合も多く、超音波ガイド下神経ブロックの有用性は高いと考えられる。</p>
研究の方法	<p>当院で術後などに鎮痛法として超音波ガイド下末梢神経ブロック・脊柱管ブロック・IV-PCAを施行した患者を対象診療録（性別・年齢・BMI・ASA・現病歴・既往歴・手術歴・麻酔方法・術中のバイタルサイン・術中の鎮痛薬使用量・麻酔時間・手術時間・ターニケット使用時間・術後の鎮痛評価・リハビリテーションの評価・副作用・合併症・局所麻酔薬血中濃度など）を調査し、鎮痛方法の比較検討を行う。</p>
その他	本研究に団体・企業等とは関与しない
お問い合わせ先	<p>本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。</p> <p>また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者</p>

さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としないので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先

住所：〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1丁目1-1

所属：旭川医科大学麻酔・蘇生学講座

研究責任者：飯田高史

電話番号：0166-68-2583